

ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEF) ¹の受け入れ状況の一研究
—ドイツの言語教育機関における聞き取り調査より—

真嶋 潤子

1 はじめに

ヨーロッパの政治経済的な統合を背景に、言語政策の一環として『ヨーロッパ言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages)』が2001年に発表されたが、この新しい枠組みは、どの程度またどのように言語教育現場で受け入れられているのであろうか。ヨーロッパにおける日本語教育に範囲を限定した調査結果が報告され (国際交流基金 2005)、ヨーロッパの8カ国における初等中等教育から高等教育、成人教育までの状況が概観されている。では、日本語以外の言語教育の分野ではどうであろうか。今年、4言語の教育プログラムを開講している本学の学術協定校において、主として CEF の導入状況について調査する機会を得た²。調査のうち、日本語学科の初級入門コースの質的研究は別稿 (真嶋 2005) に報告したが、本稿では4言語の学科長にインタビューした結果を報告し考察したい。

調査地は後述するように、ドイツの成人教育の集中言語プログラムを開設している州立言語研究所である。このような言語研究所はドイツ国内唯一であり、設立後30年の歴史と定評がある。そのような言語教育の現場において、言語学科を率いる4名の各学科長が新しい CEF の枠組みをどう捉え、どう実践して行こうとしているのかは、非常に興味深く重要な意味を持っていると考えられる。

2 CEF の意味づけ

CEF の概要と作成の経緯については、国際交流基金 (前掲書 pp.4-32) を参照されたい。ここで、CEF 参照枠の2つの作成目的だけ引用しておきたい。

(1) 言語学習者自身も含めて、言語に関わるあらゆる分野の専門家に、次のような問いかけをすること

- ・人が互いに話して (書いて) いる時、実際に何を行っているのか?
- ・そのように行動することはどのように可能なのか?
- ・新しい言語で同じことをする時にどの程度習っておく必要があるのか?
- ・全くの無知から上手な習得までの過程にどのように目標を設けてどのように自分の発展を跡づけていくことができるのか?
- ・言語学習はどのようにして起こるのか?

- ・どうすれば言語学習者が言語を学びやすくなるような手助けができるのか？
- (2) 言語の専門家が相互にまた学習者に対して、どのように言語学習を達成することを助けたり、助けようとしたりしているのかを伝えやすくすること

(欧州評議会 CEF, 2001, p.7 筆者訳)

特に(2)で述べられているように、言語学習について語るための「同じ言語」つまり共通の土台があれば、意思疎通がしやすくなるであろうことは重視したい。

さて、ヨーロッパにおける CEF の導入状況は 2004 年 7 月現在で、8 カ国について調査され報告されている(国際交流基金 前掲書)。表 1 を参照されたいが、本稿で報告する機関のあるドイツの(しかも機関があるノルトライン・ヴェストファーレン州の)状況を見てみると、外国語教育、日本語教育、自国語(ドイツ語)教育への取り入れはいずれも基本的には「政府刊行物で触れられており、言語教育政策に取り入れられている、または今後取り入れられる予定」となっている。ただし日本語教育については中等教育においてのみそうである。本調査で見た成人教育については、「不明もしくは取り入れられていない」と報告されている。そこで、実際の教育現場ではどうか、意思決定を行っている 4 名の学科長に話を聞くことにした。この報告が、現場の実情の一部として、関心のある方への参考になれば幸いである。

3 調査地

ドイツのボーフム(Bochum)にあるノルトライン・ヴェストファーレン州立言語研究所(Landesspracheninstitut-Nordrhein Westfalen; LSI-NRW)で調査を行った。本学学術協定校として交流があり、日本語の他、ロシア語、アラビア語、中国語のプログラムを常設している。(当研究所の HP: [URL:www.lsi-nrw.de](http://www.lsi-nrw.de))

4 調査方法

4 人の言語学科長に個別にインタビューを行った。2005 年 5 月から 6 月の間に、一人ずつ約 2 時間をかけた。予め準備した質問リストをもとに、自由に話すようにした「半構造化インタビュー」の形をとった³。使用言語はドイツ語で、インタビューは許可を得て録音したが、正確を期すため通訳アシスタントが同席した。ただ、アラビア語だけは、学科長が多忙のため面会の途中で交代した常勤ドイツ人教員にインタビューすることになった。

表1 ヨーロッパ8カ国の状況 (出典：2004 AJE プロジェクト)

国名	外国語教育への取り入れ		日本語教育への取り入れ			自国語教育への取り入れ
	ELP		CEF	ELP	CEF	ELP
ベルギー ^{注1} Belgium	◎ 成人教育	—	◎ 成人教育	—	◎	—
イギリス ^{注2} England	◎ 全教育段階	○ 中等成人教育	—	△ 初等教育	○	—
フランス France	◎ 中等教育 △ 初等高等教育 — 成人教育	△	—	—	○ 仏語教育	△
ドイツ ^{注3} Germany	◎ 初等中等、 成人教育 — 高等教育	◎ 初等教育 △ 高等教育	◎ 中等教育	—	◎ 成人教育	—
ハンガリー Hungary	◎	○ 高等教育除	◎	◎	—	—
アイルランド Ireland	○	○	○	○	◎ 移民英語教育	◎ 移民英語教育
オランダ The Netherlands	○	—	—	—	◎ 蘭語教育	—
スイス Switzerland	◎	◎	—	—	○	△

2004年7月現在

注1 オランダ語共同体に関して

注2 イングランド、ウェールズ、北アイルランド;スコットランドを除く

注3 ノルトライン・ウェストファレン州の例

- ◎ 政府刊行物で触れられており、言語教育政策に実際に取り入れられている、または今後取り入れられる予定である。
- 国の言語教育政策としては触れられてはいないが、実際に取り入れている教育機関もある。教育機関全体ではなくとも、ある一学部のみで導入を決定し、取り入れている場合なども含む。
- △ 小規模（例：ある言語のみに導入、あるクラスにのみに導入、ある一教師による導入）ではあるが、試行的に取り入れが進められている。または、新たに取り入れていくことが考慮されている。
- 不明もしくは取り入れられていない。

5 インタビュー結果

この節では、4 学科長へのインタビューで得た情報を学科毎にまとめて提示する。4 学科長のインタビュー結果を概観してわかることは、まず CEF に対する「温度差」が非常にあることである。ロシア語、日本語、アラビア語、中国語の順に熱い支持から冷ややかになっていく。その理由や背景は、ヨーロッパの中でもドイツにおける外国語教育であるというコンテキスト上のものもあり、また学科長をはじめとするスタッフの個別の判断によるものもあることがわかったのであるが、まずこの節では、各学科長から得られた情報を提示し、次節で考察を加えることとする。4 学科長の CEF に対する立場とその特徴を、表 2 にまとめた。

表 2 NRW 言語研究所 4 学科長の CEF に対する姿勢

言語	CEF への立場	特徴
中国語	影響されない 賛成できない	CEF には非ヨーロッパ語／文化への配慮がないことに批判的
アラビア語	まだよくわからない	日々の業務多忙のため、CEF の研究はこれから行う
日本語	反対ではないが検討中	受け入れていくべきものだろうとは考えるが、具体策は未定
ロシア語	賛成	すでに教科書にも CEF を取り入れて改編している

5-1 中国語学科長インタビュー

5-1-1 CEF の基本的考え方に対する立場

CEF そのものに反対ではない。異なる場所やプログラムで学んだ学習者の言語レベルを比較できるようにしようという考え（「イギリスで学んだドイツ語 B1 とイタリアでやったドイツ語 B1 が同じであると言えるようにすること」）は、悪い考えではない。

しかし、LSI 中国語学科としては、やってくる学習者（4 分の 3 以上が企業派遣）のニーズからして、ヨーロッパ言語を念頭において考えられた CEF を中国語に当てはめようとする時の問題点（困難点）や、そのような CEF に合わせるために教科書その他の改編をする必要性が出てくることなどを考えると、現在優先的にやるべきことであるとは考えていない。従って、CEF の導入には同意しない。つまり、基本的立場は「反対はしない」とは言うものの、CEF の導入には賛成していない。また、非ヨーロッパ語である中国語は CEF には合わないと思っている。もし CEF に対応するのであれば、独自で開発した教材をやり直す必要があるだろうが、そうする意味が見いだせないという判断である。

5-1-2 CEF を中国語に適応しにくい点

- (1) CEF はヨーロッパ言語のみを対象としており、文字が異なる言語に対する配慮が入っていない。
- (2) 文化が異なる言語に対する配慮が入っていない。
- (3) たとえヨーロッパ内言語であっても、難しさが異なることが配慮されていない。CEF の著者（英国人）の限られた言語背景（英語）のみを考慮に入れているようである。

(1) の点は、インタビューでも特に強調された。例えば、AI の書く能力として「簡単なものが書けること」と描写してあるのは、中国語を学ぶドイツ人にとっては（文字の習得が困難なため）非常に高等な能力になる。LSI の中国語学科では、文字の学習はどのコースにも取り入れている。大学の中国学とは異なり、ここに来る学習者は現地で日常生活に必要な（ホテルを予約したり、買い物に行ったりするための）中国語が口頭でできるようになることが必要なのであって、それを限られた時間で集中的に学んでいるコースで、文字に時間を割くことはできないと考えている。ただし余力のある学習者には、学ぶことができるような手ほどきはしている。辞書の使い方は教えているので、必要な学習者、できる学習者は学ぶことができる。

中国語能力試験については、漢語水平考試 HSK というのが外国人の中国語能力を測る試験として存在する。中国の大学は、その HSK の大学入学に必要なレベルを指定しているが、ドイツから留学する学生の専攻はほとんどが中国学であり、その試験を受けていない学生でも受け入れてくれるので、実質的意味はないと考えており、さらにこの上に CEF に基づいた試験をしたりする必要性は全く感じていない。

5-1-3 本中国語学科での教授内容について

表3 LSI 中国語学科の語学コース

コース	授業期間	内容
ゼロ初級コース Grundkurs	週 40 時間の授業 3 週間	語彙 800 語と中国語文法の 60%をカバーする
中級コース Aufbaukurs	週 40 時間の授業 2 週間	新しい語彙 800 語と、中国語文法の 90%をカバーする
上級コース Oberkurs	週 40 時間の授業 2 週間	新しい語彙 800 語

上級コースに入りたい人には、電話インタビューを使って実力をみる。具体的には、これまでの中国語学習歴をドイツ語で話してもらって、「それと同じことを中国語で話してください」という課題を課す。これで十分クラス分けの機能は果たしている。

漢字はどのコースシラバスにも含まないが、漢字の基礎知識は教え、辞書がひけるように指導するので、余裕のある学習者は独学できる。また教科書には漢字とピンインが並記してある。これは母語話者の教師にとって（漢字があると）見やすいからでもある。

漢字を教授内容からはずしたもう一つの理由は、学習者の年齢要因（平均 35～40 歳）を考慮した上で、過剰な負担を強くないという判断による。学科長自身も、アラビア語の初級集中コースを一度参加体験してみたことがある。学生時代には「最初 30 人の中国学専攻生がいたのに数年後マギスター（ドイツの修士号：筆者注）修了時には 3 人になっており、そのうちの一人だった」という優秀な経歴を持つ中国語学科長氏であるが、中高年になってからのアラビア語挑戦は、非常に大変で年齢要因を強く感じたという。2 週目まではまだしも、3 週目になると非常に苦痛であったと言う。

本学科にくる学習者の 70～80% は会社員であって、「修了証明書」に対する要求、必要性は低い。以前 89 年までは学生が参加者の中心だったが、天安門事件の後、学生は減少した。（学生が中心であれば、証明書に対する要求も多いかもしれないとのことである。）

従って CEF を使って到達度を「証明書」に明記するというようなことは、本学科では必要ではない。「証明書」に記載するのは、「〇〇コースを修了した」ということと、そのコースで教えた内容の詳しいリストを証明書の裏面をみればわかるようにしてある。それで苦情が出たこともないし、問題はない。

学科長自身は、1968 年の学生運動で活躍した団塊の世代であり、権力や体制に反発してきた反骨精神の持ち主である。学生時代は教授の言うことに「それは間違いだ！」と常に批判的に対していた。CEF の採用ということに関して、「上からの」「言語研究所全体として」「研究所長の方針であろうと」、それだけで CEF を受け入れるということはある得ない。少なくともまだ政治的圧力は問題になるほどには（感じてい）ない。当コースの学習者のために新しく作った教科書を CEF に「合わせ（て再編成し）なければならない」から CEF 導入は無理だと考えている。

5-2 アラビア語学科長インタビュー

CEF の基本的考え方に対する立場としては、現在はっきり反対とは言えない。それは学科内でまだ話す機会がなく、全体の意見統一がなされていないからである。個人的意見としては、アラビア語にはあてはめにくいことや、だいたい教員が忙しくて、余力がないこともあって、積極的に取り入れようという風には考えられない。

アラビア語初級コースの状況を少し説明すると、最初の2、3日で文字を教える。文字の複雑さがあり（子供用の母音並記法で書かれたテキストと、大人用の母音の書かれていない新聞などのテキストのどちらを使うかなど）アラビア語学習者に固有の問題が、CEFでは扱えないので困る。例えば、読み書きに関してはもっと詳しい段階分けが必要ではないか。（母音つきで読める段階、母音なしで読める段階、など）

アラビア語学科にくる学習者は、様々な学習動機を持っている。例えば、アラビア語を純粋に勉強したいと思ってくる人、国際結婚で子供のために学びたい人、トルコの移民の子供・学生、宗教学を学んでいる人などである。また、大学のアラビア語のコースが大きすぎて練習ができないので、参加するという学生も多い。

コース修了時には能力到達度評価のためのテストは行っていない。もし行うとすると、参加者間で競争が生まれてクラスの雰囲気が悪くなる。これもCEFに反対する理由の一つである。

クラスは8名までの少人数で行う。クラス内で参加者のレベルに違いがある。年齢、男女もいろいろで、コースによって毎回状況が異なるので、コース中は教師が過労気味になる。教員研修は、基本的に1年に1回で、あとは各自で行う。（例えば、司書のコースを教える前に、司書の教育を学ぶために研修を受けるなど。）

教員は、アラビア語学科長+専任2名+客員1名（エジプト、チュニジア、アルジェリアなどから2年任期で）+非常勤講師であるが、教員が多忙であるため、CEFの導入に関する研究まで手が回らないのが実情である。

5-3 日本語学科長インタビュー

CEFに対する姿勢は、実のところ決めかねている。初級用の独自の新しい教科書を編纂し使い始めているところであり、CEFに合わせてこれを変更しなくてはならないということになると困るといのが本音である。しかし、研究所全体として、所長の意向としては「CEFを導入する以外の選択肢はない」と言われているので、日本語学科として何ができるか検討中である。

2005年2月に研究所全体で、CEFに関する講演会が催され、理解が深まったという経緯はあるものの、常勤講師5名でこれについて議論する機会もまだきちんとはない。

日本語学科については、客員研究員として滞在していた筆者との共同研究の方向を探った結果、初級コースの内容とCEFを関連づける調査研究を行った⁴。

5-4 ロシア語学科長インタビュー

当言語研究所において、ロシア語学科長は唯一CEFの導入に大変積極的であり、インタビューにおいても以下に示すように、様々な側面から考え方や実践の紹介がなされた。

5-4-1 CEFをどのように評価しているか。

- CEF を言語の質を証明するものとして以下の 6 つの理由で肯定的に評価している：
 - 1) 政治的意味（ヨーロッパ内で通用し、例えば雇用の際に有効）
 - 2) コミュニケーション重視であること
 - 3) 能力記述文（Can-Do-Statement）が学習者にとって肯定的なアプローチであること
 - 4) 「コミュニケーション」の傘下に言語産出、言語受容、相互行為、言語仲介の 4 つの柱があること
 - 5) 参照枠をそれぞれの言語に合わせる余地がある
 - 6) ある特定の理論に偏らず、複数の理論の橋渡しをしている

5-4-2 ロシア語学科（Russicum）では CEF をどのように取り入れているか

- ロシア語学科では 2 年近く前からコース全体に CEF を取り入れている。コース参加者からの要望もあり、またプレイズメントの際に CEF レベルという「共通の言語」を使うことで話がスムーズに進む。
- 集中コースで書き言葉をあまり重視していないことから、全体として 9 割が CEF に沿っていると言える。CEF の項目は非常に多く複雑だが、ロシア語学科ではそれを 3 項目に絞っている。一つ目は「口頭コミュニケーション」で、ここには流暢さ、相互行為、結束性、正確さ（状況と話し相手に適したコミュニケーションの仕方など）、量の 5 つの指標がある。二つ目は「文法的正確さ」、三つ目は「語彙」である。
- また、ロシア語学科のインターネット・ホームページでは、ロシア語能力自己判定をすることができ、その結果が CEF のどのレベルであるか、どのコースに相当するかが分かるようになっている。
- CEF を導入するにあたっての文字表記に関して、キリル文字(28 字)もアルファベットであり、入門コース 1 日目で全部導入でき、ほとんどの場合 1 日目終了時には定着するので問題はない。ギリシャ語と共通の文字であることから、学習者にとって全く未知の文字ではないので学習はそれほど難しくない。しかし、集中コースという特徴から、作文などの書く練習は他の練習項目ほど重要視されていない。
- また、ロシア語学科のインターネット・ホームページでは、ロシア語能力自己判定をすることができ、その結果が CEF のどのレベルであるか、どのコースに相当するかが分かるようになっている。http://www.philol.msu.ru/rus/kaf/testcentre/ruscommon_3.htm
- TRKI という外国語としてのロシア語のテストでは、独自のレベルの名称があるが、CEF と同じ 6 レベルで、CEF の 6 レベルに相当する。ロシア語学科でその TRKI レベル名ではなく CEF のレベルを採用したのは、CEF の方が一般的により広く知られているからだとのことである。
- CEF 導入にあたって、教師研修などが実施されたか尋ねたところ、教師は自分で CEF についてのテキストを読む以外に、全体でのワークショップを二回行ったということであった。今年 12 月にはドイツの五つの大学から教授・講師、またモスクワの国立テストセンターからの担当者を招きロシア語学科にて会議が実施される。その場でそれまでの CEF 導入状況について発表が行われる予定である。

5-4-3 ロシア語学科のコースについて

- 日常会話を目的とした普通コースが段階別に5コースと、6つの特別コースがある。分野に分かれた特別コースは、①政治、②経済、③法律、④事務・管理・行政、⑤通訳、⑥翻訳コース。常設ではないが、宇宙飛行士コースが開かれることもあり、そのコースでは授業言語が英語で、専用の教科書がある（それでも徐々に授業言語もロシア語に移行する）。
- 他のコースについても教科書は全てオリジナルであり、普通コースの教科書はすでにCEFに沿って改訂している。他の教科書も、改訂している段階、またはその予定である。
- コースは2週間、または1週間の集中コースで、1日の授業時間数は90分×3（=6授業時間）。以前は4週間の集中コースがあったが、現在は参加者の時間的制約から1つのコースを短くし、時間的余裕がある人は複数のコースに続けて参加できるようコースが組み立てられている。
- 1日の授業は午前を導入、午後にその練習を行なう。午前がドイツ人教師、午後はロシア語母語の教師が（あるいはその逆）授業をすることで、教師の言語的背景に偏りがないように配慮されている。授業は文法説明と語彙説明を除き、できるだけロシア語で行っている。
- 1グループの大きさは、6人が理想だが、最高8人まで許容している。
- コースにはe-learningも取り入れられているし、授業外でもe-learning、ロシア語の新聞購読、ロシア語のテレビ放送をみることを薦めている。
- ロシア語学科のコース参加者については、5割が大学生（専攻は様々で、スラブ学科の学生は非常に少ない）、後の5割はそれ以外と言える。後者に属するのは、大企業のマネージャーと会社員、外交官、ジャーナリストなどである。ドイツ語母語話者以外にもコースに参加する人がいるが（全体で5%ほど）ドイツ語が理解できることが前提となっている。参加者のうち5割がゼロ初級者といえる。
- 参加者がコース評価をする機会について尋ねたところ、二回ある。一回はコース半分終了時で、口頭によるコース評価。二回目はコース終了時のアンケート調査。アンケートの記入も記名も任意。アンケート項目は、教科書、授業中のコミュニケーション、コース構成の分かりやすさ、改善の提案についてなど細分化されている。

5-4-4 ロシア語学科のコース修了証明書について

- コースの内容、教科書などについて詳細に記述したものをロシアの文部科学省の国立テストセンターに、それが各CEFレベルに相当するという証明をしてもらっている。これによって、ロシア語学科のコースがCEFの各レベルに対応しているという信頼性につながる。
- コース修了テストは自己チェックの形であるが、成績がでることも、教師がそれを評価することもない。コースを最後までやり通したということで、そのコースのレベルに到達したとみなされる。

5-5-4 これからのロシア語学科の取り組み

- 一つは、今年初めて実施する「刑務所看守用コース」である。ドイツ全体で初の試みとして（学科長の知る限りでは他の言語についてもそのようなコースはない）、まず NRW 州で実施される。背景には、ロシア語母語話者またはロシア語を介する刑務所収監者が増えており（多くとも全体の 25%程という学科長の推測）収監者同士の会話を看守側が理解する必要性、また看守と収監者間のコミュニケーションのためにこのコースが構想された。コース計画にあたり、実際に刑務所を訪れ、そこでのコミュニケーションについて観察も行った。
- もう一つの新しい試みは、今年秋に始めて実施されるドイツの高校生用のロシア語テストで、ロシアの文部科学省に所属する国立テストセンターと協同で作成。試験に合格すると、ロシア政府公認の証明書が発行され、生徒にとってはロシアの大学に入学する場合の語学能力証明として有効である。この試験は筆記(2005年9月24日この建物にて実施)とその4週間後に口頭試験があり、口頭試験の際には、モスクワからの試験官とドイツ人試験官の2名が試験を行う。
以上のように、ロシア語学科では、ドイツ社会におけるロシア語教育のニーズに対応した新しい取り組みを行っているが、今後もこういう実践的な取り組みを進めて行く予定である。このような取り組みに、今後さらに CEF を活用していく可能性もあるだろう。

6 考察と課題

今回の調査からは、当言語研究所において、CEF に関して明確に賛同の意を唱え、積極的にカリキュラムや教材に取り入れているロシア語、基本的には賛成だが具体化に悩んでいる日本語、はっきり拒絶するわけではないが導入困難点を指摘するアラビア語、CEF には非ヨーロッパ語への配慮がないし現在は受講生への益になるとも思わないので、取り入れないという中国語というふうに、CEF への熱い支持から冷ややかになっていくことが示された。その理由や背景は、ヨーロッパの中でもドイツにおける外国語教育であるというコンテキスト上のものもあり、また学科長をはじめとするスタッフの個別の判断によるものもあることがわかった。

今回の調査に応じてもらった学科長たちは、各学科の方針を決定する権限と責任を持っているので、各人の考え方とドイツにおけるそれぞれの言語教育という状況が日本における場合とは異なり興味深い。CEF のような言語政策がらみの事項は、色々な要因に現場が影響されて状況が変わってくるので、これからも目が離せないと思う。

7 おわりに

本学の日本語を含む 25 言語の語学教育の改善に示唆を得るため、また広く日本の高等教育機関における語学教育への示唆を得るためには、先行研究（国際交流基金 前掲書）だけでなく、他の言語の教育現場での CEF 受け入れ状況についても把握しておきたいと考え、今回の調査を行った。ドイツで成人に対する外国語教育を行っている学科長の、それぞれに異なった考え方や判断はいずれも興味深く、語学プログラムのあり方を考慮する際に配慮すべき点が多岐にわたることが伺えた。

2001年にCEFが世に出されて以来、そのような新しい枠組みに現場の責任者としてどのように対応していくかという問題は、個人のレベルを越えて言語政策的な側面を多分に含んでおり今後も変化があると思われる。

註

1 ヨーロッパ言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages) の略称を CEF (セフ/シェフ) と呼ぶことが多いので、本稿でも便宜上 CEF を使っておく。しかし、この言語能力の枠組みが「参照 Reference」すべきものである、または「参照するにすぎないもの」であることを含めて CEFR を使うこと (Panthier 2005) もあることを追記しておく。

2 本調査は文部科学省採択による大阪外国語大学のプロジェクト「平成16年度 海外先進教育研究実践支援プログラ —世界基準の多言語教育システムの構築—」の成果の一部である。

3 質的研究方法は、『質的研究方法入門』ウヴェ・フリック (2002) などに詳しい。

4 詳細は、真嶋 (印刷中) またはヨーロッパ日本語教師会『第10回日本語教育国際シンポジウム予稿集』(2005年9月9-11日 於・ルーヴァンカトリック大学) を参照されたい。

【参考文献】

大阪外国語大学教育推進室語学教育ワーキンググループ 2005『2004年度(平成16年度)学内特別研究費II活動成果報告書: 語学教育における到達度評価策定のための基礎研究』大阪外国語大学

国立国語研究所 2004『世界の言語テストI』平成15年度「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」報告書

菅井英明ほか 2003『日本語教育における評価法に関する基礎的資料整備とその分析』平成13~14年度文部科学省科学研究費補助金基盤(C)(2)研究成果報告書

藤原美枝子 2003「ヨーロッパにおける言語運用能力評価の共通フレームワーク —コミュニケーション能力の新しい理解をめぐって—」『言語と文化』第7号 甲南大学国際言語文化センター pp.101-124.

フリック、U. 2002『質的研究入門 —<人間の科学>のための方法論』春秋社

真嶋潤子 (印刷中)「ヨーロッパ言語共通参照枠(CEF)と言語教育現場の関連づけの一研究 —ある日本語コースの質的研究—」『2005年 ヨーロッパ日本語教育シンポジウム 報告書』ヨーロッパ日本語教師会

ヨーロッパ日本語教師会(AJE) 2005『日本語教育国別事情調査: ヨーロッパにおける日本語教育とCommon European Framework of Reference for Languages』国際交流基金

吉島茂、大橋理枝（訳・編） 2004 『外国語教育II – 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社

Bausch, K-R., et al. (Eds.) 2003 *Der Gemeinsame europäische Referenzrahmen für Sprachen in der Diskussion*. Tübingen: Gunter Narr Verlag.

Chevallier-Wixler, Dominique, N. Gourgaud, & B. Mègre. 2004 *DELF Scolaire Niveau A2 du cadre européen commun de référence*. Paris: Les Editions Didier.

Conseil Europe 2004 *Niveau B2 pour le français (utilisateur / apprenant indépendant): Un référentiel*. Paris: Les Editions Didier.

European Language Council (Ed.) 2002 *European Language Portfolio – Higher Education*. Berne: Editions scolaires du canton de Berne (BLMV).

Glaboniat, Manuela 2005 *Profile Deutsch*. Berlin: Langenscheidt.

North, Brian 2000 *The Development of a Common Framework Scale of Language Proficiency*. NY: Peter Langa Publishing, Inc.

Panthier, J. 2005 The Council of Europe's standards of language proficiency, *International Roundtable on the Establishment of Standards for Japanese-Language Education (First Session)*, Japan Foundation [国際交流基金「日本語教育スタンダードの構築をめざす国際ラウンドテーブル（第1回）」] pp.57-58.

Pienemann, M. 1999 *Language Processing and Second Language Development: Processability Theory (Studies in Bilingualism, 15)*. John Benjamins Pub Co.

Schneider, G. & B. North. 2000 *Fremdsprachen können – was heisst das?* Zürich: Verlag Rüegger.

Schwerdtfeger, Inge C. 2003 Der europäische Referenzrahmen – oder: Das Ende der Erforschung des Sprachenlernens? In: Bausch, Christ, Königs & Krumm (Hrsg.): *Der Gemeinsame europäische Referenzrahmen für Sprachen in der Diskussion*. Gunter Narr Verlag Tübingen. S.173-179.

【資料】 関連サイト（2005年10月現在）

外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 [Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment (CEF)]

• 欧州評議会CEFホームページ

http://culture2.coe.int/portfolio/documents_intro/common_framework.html

http://www.coe.int/T/E/Cultural_Co-operation/education/Languages/Language_Policy/Common_Framework_of_Reference/default.asp

- Council of Europe (2001) Common European Framework of Reference for Language: Learning, Teaching, Assessment. Cambridge: Cambridge University Press. [ISBN: 0521005310 (paperback) 0521803136 (hardback)] <http://uk.cambridge.org/>

上記文献は以下のサイトより各国語で出版社情報入手もしくはダウンロード可能

[http://culture2.coe.int/portfolio/inc.asp?L=E&M=\\$t/208-1-0-1/main_pages/./documents_intro/common_framework.html](http://culture2.coe.int/portfolio/inc.asp?L=E&M=$t/208-1-0-1/main_pages/./documents_intro/common_framework.html)

- CEF 日本語版

<http://www.dokkyo.net/~daf-kurs/library.html>

- AJE-CEFプロジェクトサイト

<http://aci-hayama.soken.ac.jp/groups/aje/cef.html>